

共同体帰属意識の背後にある心理的要因の探索

名古屋大学減災連携研究センター
ライフライン地盤防災産学協同研究部門
北川夏樹

共同体の防災力と帰属意識

・家族
・地域
・組織
・国家

ex. 地域への帰属意識が、
もたらすと想定されるもの

< 発災時 >

住民間の共助・コミュニケーション

< 平時の活動 >

地域防災への自主的な参画(防災計画・訓練)
災害の語り継ぎ、啓蒙活動

< 防災減災に資する環境整備 >

防災インフラ事業(税金、工事負担)への住民合意
若者の流出抑制(共助キーマンの減少防止)

帰属意識の高い人に共通する心理とは？
帰属意識を喚起させる施策とは？

二人の哲人からのヒント

本研究では帰属意識につながりうる心理として、
二人の哲学者の思想・理論から演繹される概念に着目する。

(1) ニーチェの「運命愛」の概念

(2) ハイデガーの「本来的時間性」の概念

各概念はそれぞれの哲学者が説く「理想の生き方」を表す
ものであり、共同体との関わりに関しても少なくない影響を
与える考えであるといえる。

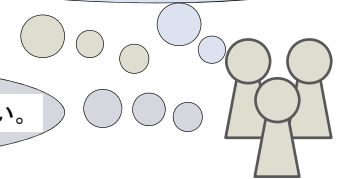
(1) ニーチェの「運命愛」

< 当時の人々の思想 >

現世が辛くても、死後に期待する(現実逃避)

「魂の救済」のために、善行を重ねる。

「天罰」が怖いから、悪いことはしない。



「生きる意義」を死後の世界に見出し、現世の事象から目をそらすような考え方。

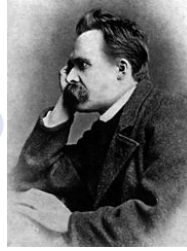
「生の重心が、生の中ではなくて、『彼岸』の中
へ—無の中へ—移されるなら、生は一般に重
心を奪われてしまうことになるだろう」

「アンチクリスト」より



ニーチェ(1844-1900)

(1) ニーチェの「運命愛」



ニーチェ(1844-1900)

「魂の救済」のために、善行を重ねる

現世が辛くても、死後に期待する(現実逃避)

「天罰」が怖いから、悪いことはしない。

ニーチェは従来の考えを批判し、**現世にこそ生きる意義を見出す**ことを奨励したのである。

生きる意義を現世に見出す人(今の人生をより良いものにしたい)にとって、**現世でのあらゆる事物**は自己の運命に影響を及ぼしうる、極めて重要なものとなる。

ニーチェは、望まないものも含めた**全ての事物**に対し、「愛する」ほど真剣に向き合い、**現世を懸命に生きる**ことを説いた。



運命愛

現世での事物には共同体への所属や出来事が大いに関わってくる。
運命愛の考え方を持つことが、共同体への帰属にも影響しているのではないか。

運命愛尺度の作成

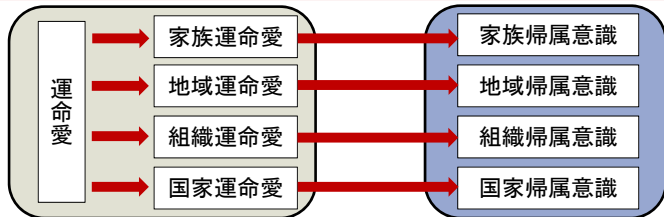
ニーチェの著書から運命愛について述べている箇所を抽出し、質問項目を作成した。以降の項目にどれくらい当てはまるか、7件法で尋ね、回答値を平均することで尺度値を算出した。

- ・良いものも、悪いものも含めてこれまで自分が辿ってきた全てのものから目をそらすようなことはしない。
- ・将来自分が、どんな運命を辿ろうとも、全て受け入れようと思っている。
- ・自分の人生については、たとえ嫌いなところであっても、受け入れようと思う。
- ・自身の振る舞いは、自分の人生に影響を及ぼさざるを得ないと思う。
- ・これまで忌避されてきた側面を含めて、過去のすべての歴史があるからこそ、今の自分があると感じている。
- ・もう一度生まれ変わるとしても、今のこの人生と同じ人生を生きたいと思う。

さらに、尺度の文言を改変し、**各共同体(家族、地域、組織、国家)に対する運命愛**尺度も作成した。➡️**共同体と真剣に向き合い、共に歩もうとする傾向**

ex. 地域運命愛尺度

- ・良いものも、悪いものも含めて、『自分の住む地域』から目をそらすようなことはしない。
- ・自分の地域に将来どんなことがあっても、地域の一員として共に歩いていこうと思っている。
- ・自分の地域については、たとえ嫌いなところであっても、受け入れようと思う。
- ・自身の振る舞いは、地域のあり方に影響を及ぼさざるを得ないと思う。
- ・もう一度生まれ変わるとしても、この地域に生まれたいと思う。



参考: 質問文と原文の対応

質問文	原文(主に下巻部を参考に質問を作成)
1. 良いものも、悪いものも含めてこれまで自分が辿ってきた全ての歴史から目をそらすような事はしない。	「人生の偉大さや言い渡す私の決まった言い方は、運命愛である。すなわち、何事も運にそれがあつたのは別様であつて欲しいとは思わぬこと、未来に向かつて(1)、過去に向かつて(2)、そして永遠にわたつても絶対にそう教しないこと、必然を単に耐え忍ぶだけではないのだ、いひんやそれを隠蔽することではさらさらない、一あらゆる理想主義は、必然から逃げている嘘いつわりにはかならず、一、そうではなく、必然を愛すること…」 【この人を見よ—なぜ私はかくも惨憺なのか】 ⁷² 10
2. 将来自分が、どんな行く末を辿ろうとも、全て受け入れようと思っている。	「私は、いよいよもつて、事物における必然的なものを美として見ることを、学ぼうと思う、一こうして私は、事物を美しくする者たちの一人となるであろう、運命愛(Amor fati)、—これが今よりの私の愛であれかし！私は、誰いものに対し、厭いませしかけようなどとは思ひもしない、私は非難しようとは思わぬし、非難者をすら非難しようとは思わぬ、眼をそむけること、それが私の唯一の否認であれかし！そして、これを要するに、私はいつかきつただひたむきな一個の肯定者であらうと願うのだ！」 【悦ばしき知識】 ⁷² 276
3. 自分の人生については、たとえ嫌いなところであっても、受け入れようと思う。	「ごく少数の人々にしか明らかになつていないことだが、願望の立場のうちに、「これこれであるべきだが、そうならない」とか、さらに「こうあるべきであつたのに」とかいういづれのうちにふくまれているのは、事物の總体的な歩みを断罪することである、なぜなら、事物の歩みのうちには孤立しているものは何ひとつとしてないからである、最小のものすら全体をない、君のささいな不正も未来の全構成に關係し、最小のものにむけられるいづれの批判も同時に全体を断罪することとなるのである、」 【権力への意志】 ⁷³ 331
4. 自身の振る舞いは、自分の人生に影響を及ぼさざるを得ないと思う。	「然り」への私の新しい道、一私がこれまで理解し生きぬいてきた哲学とは、生存の憎むべき厭うべき側面をもみずからすすんで探求することである、(中略) デイオニソス的に然りと断言することまで、一それは永遠の円環運動を敬する、一すなわち全く同一の事物を、結合の全く同一の論理と非論理を、哲学者の達しうる最高の状態、すなわち、生存へとデイオニソス的に立ち向かうという(6)、このことにあつた私の定式が運命愛である、そのために必要なのは、これまで否定されてきた生存の側面を、必然的としてのみならず、望ましいとしてとらえるということ、だからそれを、これまで肯定されてきた側面に關して望ましいとして(たとえこの肯定されてきた側面の補足や前提条件として)のみならず、否定されてきた側面自身のために、生存の意志をしてより明確におのれを隠らしめるところの、より強力な、より豊饒な、より真実な生存の側面としてとらえるということである(5)
5. これまで忌避されてきた側面を含めて、過去のすべての歴史があるからこそ、今の自分があると感じている。	【権力への意志】 ⁷³ 1041
6. もう一度生まれ変わるとしても、今のこの人生と同じ人生を生きたいと思う。	

(2)ハイデガーの「本来的時間性」

ハイデガーは人間本来の生き方として、

「将来のあらゆる可能性を想定し、備えること」、
「過去の経験や歴史を忘却せず、反復すること」

を挙げている。

その上で彼は、最も遠い将来にある究極的な可能性である「**自らの死**」をも想定し、覚悟を決めておくことを説いた。

死をも想定することでそれに至るまでの**あらゆる可能性を先駆的に覚悟し、過去の経験を反復した上で最善に備える。**

➡ **本来的時間性**



ハイデガー(1889-1976)

「あらゆる可能性を考慮し」、「過去を反復する」ためには、共同体をはじめとした環境やそこでの出来事・経験も十分考慮する必要があるだろう。
(→「運命愛」や帰属意識の要因となりうる?)

本来的時間性尺度の作成

著書や書評を参考にし、質問項目を作成した。以降の項目にどれくらい当てはまるか、7件法で尋ね、回答値を平均することで尺度値を算出した。

- ・人はいつ死んでもおかしくないと思う。
- ・自分が死ぬなんてコトは、全く想像できない。*
- ・「明日、自分が死ぬこともあるだろう」と当たり前を感じる。
- ・「自分もその内、死ぬんだなあ」と自然に感じる。
- ・この世の中、何が起っても全然不思議ではないと思う。
- ・何も努力していなくても、きっと自分の人生はうまくいくと思う。*
- ・今さえ良ければそれでいいと思う。*
- ・昔のことは、だいたい忘れる。*
- ・何かやるとき、経験があるかないかで、ぜんぜん違う。

(*は逆転項目)

参考: 質問文と原文の対応

質問文	原文(主に下線部を参考に質問を作成)		
I 死への先駆的覚悟	1. 人はいつ死んでもおかしくないと思う。	関心は死へ臨む存在である。死とは、まえに性格づけられたように、現存在が絶対に不可能となることの可能性である。われわれは先駆的覚悟性をも、このような可能性へ臨む本来的存在として規定しておいた。このような形でおのれの終末に臨む存在において、現存在は、『死の中へ投げられて』存在しうる存在者として、本来的に全体的に実存しているのである。	
	2. 自分が死ぬなんてコトは、全く想像できない。		原書より
	3. 「明日、自分が死ぬこともあるだろう」と当たり前前に感じる。		
	4. 「自分もその内、死ぬんだなあ」と自然に感じる。		
II 将来への先駆	5. この世の中、何が起っても全然不思議ではないと思う。	根源的な本来的時間性は、本来的な将来から時差し(II)、そして将来的に既往しつつ(III)、そこではじめて現在を喚起する。	
	6. 何も努力していなくても、きっと自分の人生はうまくいくと思う。*		原書より
	7. 今さえ良ければそれでいいと思う。*		
III 既往の反復	8. 昔のことは、だいたい忘れる。*	本来的時間性にあつては、将来はもつとも自己の究極の可能性であるおのれの死への「先駆」として(II)、既往はあなたがままのおのれをふたたびとりもどし、それに意味を与えなおすこと、つまり「反復」として(III)、そして現在は、そのように先駆し反復することのうちに開かれてくるおのれの置かれた歴史的状况に豁然と眼を開き、それを「瞬間」的に直視すること— (中略) 非本来的に生きている現存在はおのれ自身の死から目を背け、眼の前に現れてくる事物との関わりで没頭する。そこでは、将来はまだないものである可能性の運命とした「期待」として(II)、既往はもはやないものの「忘却」として(III)、そして現在はそれだけがあるものだとされる眼前のものを「現前」させることとして生起し、しかしそこではこれら三つの脱自意識の結びつきが弛緩し、「現前」だけが突出しようとする(7)。	
	9. 何かやるとき、経験があるかないかで、全然違う。	書評「存在と時間の構築」より	

想定する関係性

本来的時間性

「自らの死」に至るまでの**将来のあらゆる可能性を覚悟し、過去を反復しながら、備えに最善を尽くす。**

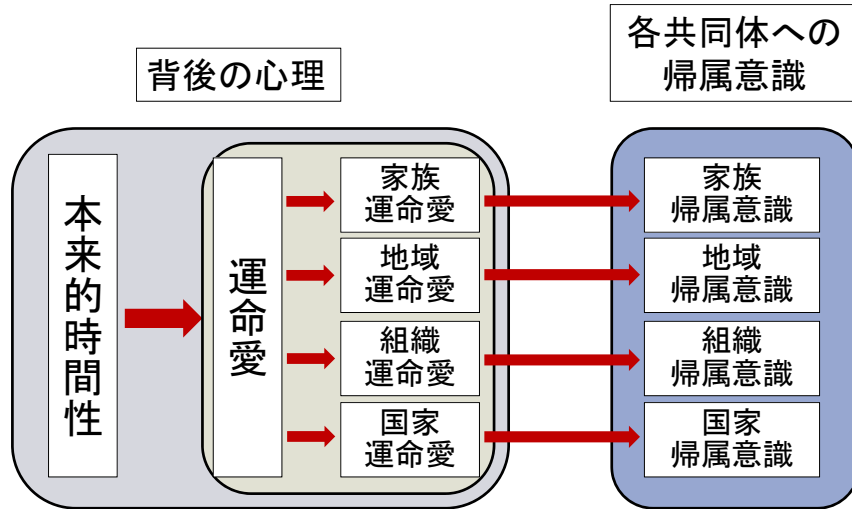
運命愛

あらゆる可能性に影響し得る、自己を取り巻く事物と**真剣に対峙する。**

帰属意識

共同体やその中の**人間関係**への関わりを深くする。

想定する関係性



調査

日程: 2011年12月
 対象: 楽天リサーチの日本人モニター300名(男女各150名)
 形式: WEB画面でのアンケート調査



主な質問
 ・各共同体への帰属意識
 ・運命愛尺度(本来のものと共同体毎のもの)
 ・本来的時間性尺度
 ・個人属性等

結果の考察

①本来的時間性と運命愛の相関分析 (***) $p < 0.01$, (**) $p < 0.05$, (*) $p < 0.1$

	運命愛
本来的時間性	0.187(***)

➔ 本来的時間性傾向が強いほど、運命愛傾向も強い。

②運命愛と共同体別運命愛の相関分析 (***) $p < 0.01$, (**) $p < 0.05$, (*) $p < 0.1$

	家族運命愛	地域運命愛	組織運命愛	国家運命愛
運命愛	0.481(***)	0.104(*)	0.257(***)	0.465(***)

➔ 運命愛傾向の強い人ほど、共同体別の運命愛(共同体と真剣に向き合い、共に歩もうとする傾向)が強い。

結果の考察

③共同体別運命愛と帰属意識(コミットメント尺度, 人間疎外尺度)の相関分析 (***) $p < 0.01$, (**) $p < 0.05$, (*) $p < 0.1$

	家族運命愛		地域運命愛
家族コミットメント	0.745(***)	地域コミットメント	0.751(***)
家族人間疎外	-0.733(***)	地域人間疎外	-0.794(***)
	組織運命愛		国家運命愛
組織コミットメント	0.698(***)	国家コミットメント	0.778(***)
組織人間疎外	-0.835(***)	国家人間疎外	-0.623(***)

尺度の説明
 ■コミットメント尺度
 共同体への愛着, 一員感, 共同体に忠実であるべき(規範要素)等で構成される尺度. 田中(1996)などの諸研究を参照し尺度を設定した.
 ■人間疎外尺度
 共同体との精神的な結びつきの希薄さを表す尺度.
 渡辺, 藤井ら(2009)

➔ 共同体への運命愛が強い人ほど、共同体への帰属意識が強い。

本来的時間性を喚起するには

人々の**本来的時間性**を喚起するような教育・啓蒙活動を行うことは、運命愛傾向を高め、共同体への深い帰属を促す可能性がある。
では、どのように本来的時間性を高めるか？



本来的時間性は、「**自らの死**」を先駆的に想定することが、その他のあらゆる可能性への備えにつながるという考え方。



死に関して考える契機があった人ほど、本来的時間性が高いのでは？

本来的時間性を喚起するには

「死に関する経験の伝聞」の有無について尋ね、本来的時間性との関連性を検証した。

④死に関する伝聞のダミー変数と本来的時間性の相関分析

	臨死体験の伝聞D	家族を亡くした伝聞D	知人を亡くした伝聞D
本来的時間性	0.213(***)	0.236(***)	0.217(***)

(***) $p < 0.01$ 、(**) $p < 0.05$ 、(*) $p < 0.1$

死に関する伝聞が、本来的時間性や運命愛に影響を及ぼす可能性

防災施策への展開

人は「**死に関する伝聞**」を通じて死を身近な、いつ遭遇してもおかしくないものと感じることで、本来的時間性が喚起される。



自己や共同体が遭遇しうる「**死の危機**」を認知させるような**取り組みの実施**が、人々の本来的時間性を醸成する可能性がある。

- ・「語り部」活動や防災教育、祭りでの災害歴史伝承
- ・被害想定的高度化、企業BCP策定の促進 など

上記は、**共同体への強い帰属を促す**という意味でも、有意義な施策



本来的時間性の高い人は共同体へ強く帰属するため、共同体内での交流の中で、他の人にも**本来的時間性**が伝播することも考えられる。

人々の本来的時間性が次々に喚起されていけば、その共同体は災害などの突発的事態に対しても最善の対策をとる**強靱な共同体**に、おのずとなりうるのではないだろうか。